

からしだね

日々のみことばの黙想と、主日礼拝の準備に……

2026.4.27-5.3

<p>4.27 月曜日</p>	<p>「肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、霊に従って歩む者は、霊に属することを考えます。」(ローマ 8:5) ●「肉に属すること」とは単なる知覚的な罪(物欲、過剰な食欲、性欲…)だけを示すものではありません。肉の思いとは、キリストに反する思いや、隣人を愛することを阻む思いのことを示します。これに打ち勝つために人間自身できることは何もありません。信仰の内におられるキリストによって私たちを造り変えていただくしかないので。信じることで宿ってくださるイエス・キリストの臨在を確かに感じ、隣人を愛する者へと変えられたいのです。</p>
<p>4.28 火曜日</p>	<p>「ダビデは次第に勢力を増し、万軍の主は彼と共におられた。」(歴代上 11:9) ●歴代誌はイスラエルの名家の系図の記録によって始まり、サウルの死、ダビデ王の登場によって始まってゆきます。歴代誌でのダビデの姿は勇ましい戦士、有能な統治者というよりも、むしろ敬虔な礼拝者として描かれています。そこには、最終的に自分では完成させることが許されなかった神殿についての葛藤と、それでも神に従い続ける信仰の姿があります。ダビデにとって重要だったのは、目に見える神殿の完成よりも「神と共にいる」ということでした。罪を深く自覚した彼は、それを心から願い続けました。(サム下 12章)</p>
<p>4.29 水曜日</p>	<p>「ひとりよりもふたりが良い。ともに労苦すれば、その報いは良い。」(コヘレト 4:9) ●神が考える“賢い人”は、目標のためには協力を惜しまない人であると語られています。人間の罪は、「自分だけで生きて行ける」という自己愛に根源があるのでしょうか(創 3:5)。自分への高い期待こそ、現代人が抱える自己肯定感の低さという問題を生み出しています。自分に頼るのではなく、誰かに頼り、そして神に頼ることを知る者でありたいのです。箴言はそのような者こそ、結果的に多くの成果を結ぶと語ります。</p>
<p>4.30 木曜日</p>	<p>「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい。」(コロサイ 3:23) ●神は心から出ていない行動を鋭く見ておられる方です。「義人はいない」という教理を強調した宗教改革者ル</p>

ターは、人間の心(良心)は墮落によって完全に汚されてしまったと語ります。これを、清めるにはキリストに対する信仰しかないのです。キリストによって清められた心から初めて主に対する愛が出てくるのです。そうして、神への愛から隣人への愛が溢れ出てきます。「信仰→神への愛→隣人への愛」の順番が重要です。

5.1 金曜日

「正しい人は自分の無垢に導かれ、裏切り者は自分の暴力に滅ぼされる。」(箴言 11:3) ●箴言には「正しい人」と「悪い人」(裏切者)が対比的に描かれています。しかし、人間は正しい瞬間もあれば、悪い瞬間もある微妙な存在です。箴言は二人の全く違う人について語っているのではないでしょう。一人の人が、その瞬間瞬間で「正しさ」を選ぶのか「不正」を選ぶのかを問うているのです。人生は選択の連続です。その時々箴言を通して神さまの御意志を知ってゆきましょう。神さまは、ここで私たちの暴力ではなく無垢(誠実)を望んでいるのです。

5.2 土曜日

「彼らは剣を打ち直して鋤(すき)とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」(イザヤ 2:4) ●イザヤ書 2 章では、終わりの日に、この世界のすべての人々が「主の神殿の山」に向かい、武器も、敵意も捨てて神のもとに集結することが預言されています。イザヤ書のいたるところで、最終的には、すべての人々(万人)が主にひざまずく「万人救済」的なモチーフが描かれています。しかし、聖書の他の箇所には、信じる者だけが救われる排他的なモチーフも描かれています。この矛盾を完全に理解する事は人間にはできません。できることは今、このみことばに向き合っている私たち一人ひとりが、神に向かって行くのか、否かです。

5.3 日曜日

「『キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた』という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。わたしは、その罪人の中で最たる者です。」(1 テモテ 1:15) ●パウロは聖書の中で最も人間の現実に取り組み、それを書き残した人物であったと言えます。彼は、自分を模範として(フィリピ 3:17) 語る一方で、「最たる罪人」と語ります。キリストはこのような者の内に住まれるのです。「自分こそ、この地上で最も小さきものである」と心から思うときに、神はその余白に恵みを注ぎ込むのです。自動車と同じように、人間にもオイル交換が必要です。私たちは「自分」という古くなったオイルを捨て、「イエス・キリスト」という新鮮な、そして永遠に朽ちないオイルを充填させるのです。